

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大学進学のため、上京することになったカズユキ。最後
の一日は特別な一日と思い、出発の遅い夜行列車で行くことにしたのだ
が……。

自分の部屋に入ると、やっぱり新幹線にすればよかっただろうか、と後悔がじわじわ湧いてきた。あと十時間以上——夜行列車に決めたときには最後の一日は貴重なんだからと思っていたが、実際にその日になってみると、することはなにもない。

上京の手荷物はすべてスポーツバッグに詰めてあるし、音楽を聴こうにもラジカセはすでに引越業者が運び出してしまった。部屋の本棚に残してあるマンガも、東京に持って行くリストからはずれたものばかりなので、たいして面白くない。

作戦ミスだった。わが家で過ごす最後の一日というものを過大評価していた。風呂場から洗濯機を回す音が聞こえ、ほどなく、それに掃除機の音も重なった。

おふくろさんはふだんどおりに家事をこなしている。親父さんもいまごろ、ふだんどおりに会社で仕事をしているだろう。

居間に下りて、テレビでセンバツの高校野球を観た。畳に寝転がっていたら、カゴに入れた洗濯物を両手に抱きかかえたおふくろさんが入ってきて、

「ちょっと、そこ邪魔、どいて」と言われてしまった。

「ころころしとるんやったら、クリーニング屋さんに行つて、服もろうてきて」

「ごころ——という一言が耳に刺さった。

「あと、お昼ごはん、お弁当でも適当に買いうてきて」

適当に——という一言が胸を締めつけた。

(①)。心から思った。

クリーニング店に向かって自転車をとぼしながら、は何度もため息をついた。

張り切りすぎていた。空回りだった。(②)……と、うめばれていたのかもしれない。

考えてみれば、ツツパリ仲間にくつついていたせいで親に迷惑と心配ばかりかけてきたのだ。大学に現役で合格してなんとか帳尻は(A)ものの、高校時代は警察や学校に呼び出されたり、遊びに来る友だちのバイクの騒音で近所から苦情が出たりと、ろくな息子ではなかった。

(③)。ふと思った。だから夜行じゃなくて新幹線にしろと言ったんだろうな。少しでも早く俺を追い払いたくて、俺の顔なんかこれ以上見たくなくて……そういえば、親父の声もおふくろの声もそっけなかったよなあ……。

しょんぼりとして家に帰って、暇を思いきり（B）ながら午後の時間を過ごしていると、おふくろさんがとめの一言を言った。

「ほんなら、お母ちゃん、ちよつとパートに出てくるけん」

「今日、仕事なの？」

「ほうよ、今度からあんたの仕送りでお金がかかるけん、パートの曜日を一日増やしてもらうたんよ」

「……帰り、何時？」

「七時過ぎかなあ。もうあんた、駅に行つとるやろ」

「うん……」

「戸締まりだけ、ちゃんとして行つてな」

家にはカズユキ一人だけ残された。「行つてらっしゃい」とおふくろさんを見送るのが最後の一言になるなんて想像もしていなかった。

「行つてきます」と言うのは俺のほうじゃなかったのか？ おふくろは玄関で涙ぐみながら「行つてらっしゃい」と俺を見送るはずじゃなかったのか？

（④）。

落ち込んだまま家を出て、落ち込んだまま駅に向かい、もしかしたら両親が駅に見送りに来てくれるかもしれないという最後の希望を託してホームを見渡し、誰もいないのを確かめて、泣きだしたい気持ちで列車に乗り込んだ。

席について、マンガでも読もうかとスポーツバッグを開けると――着替えの奥に、黄色いものを見つけた。

こんなもの入れたつけ、と怪訝に思いながら取り出してみると、それはポンカンだった。

鮮やかな黄色の皮に、サインペンで文字が書いてある。

〈悔いのないように大学生活を送ってください 父〉

〈健康第一でがんばってください 母〉

二人の字だ。間違いない。親父さんとおふくろさんの字だった。カズユキが出かけている隙に、おふくろさんがこっそりバッグに入れたのだろう。親父さんも書いているということは、もう、ゆうべのうちに作戦を立てていたのだろう。

列車が動きだす。ガタン、という揺れに紛らせて、へへつと笑った。

「西の地方の夕暮れは遅い。空にはまだ夕陽の明るさがかすかに残っていた。窓の外をふるさとの風景が流れる。わが家で過ごした日々が遠ざかっていく。

カズユキはポンカンの皮を剥いた。酸っぱい果汁がピュツと飛び散って、目に染みた。」

（重松清「拝復、ポンカンにて」による）

※ 怪訝…不思議でわけが分からない様子。